萬葉拾穗抄　二十之二

萬葉集巻第二十

大納言藤原朝臣
房前(フサ)卿(マヘツキミ)
少王鈴(スヘノオホキミスヽ)
山田史(ヤマタノフヒト)
先(マヅ)
其(ソノ)
姓(カバネ)
名(ナ)
也(ヲ)
并(アハセ)
天平勝寶五年五月
幸(イデマス)
于(ニ)
山村(ヤマムラ)
之
時
先太上天皇
陪從王臣
請王侍宴(ウケタマハリテミアソビス)
和歌

あしひきの山のまもりと
いつもいつも
かくしてあらむ
ものにもがもや

舍人親王(トネリノミコ)

あしひきの山のまもりと
いつもいつも
かくしてあらむ
ものにもがもや

大納言藤原朝臣
幸(イデマス)
于(ニ)
山村(ヤマムラ)
歌二首
在(レ)
之
時
依(ヨリテ)
奏(マヲス)
事(コト)
而
請問(トヒマヲス)
之
間
少王鈴山田史土麻呂語(カタラヒテ)
少納言大伴宿禰家持(ヤカモチ)
曰
昔聞此言(コノコトヲキケリ)
即誦(ソラニヨメリ)
此歌(コノウタ)
也

天平勝寶五年五月幸(イデマス)行於山村之
時先太上天皇詔(ミコトノリシタマヒテ)陪從王臣曰諸王
卿等宜賦(ツクレ)和歌(ウタヲ)而奏(マヲス)即御口號(ミクチズサミニ)曰

太上天皇

あしひきの山のまもりと
夜麻都加(夜麻都加)
いつもいつも
かくしてあらむ
ものにもがもや

和歌(ウタ)

舍人親王(トネリノミコ)

夜麻妣等(夜麻妣等)

あしひきの山のまもりと
情(こころ)
いつもいつも
かくしてあらむ山人やも

天平勝寶五年八月十二日二三
大夫(マヘツキミ)等各(オノオノ)提壺酒(ツヽヲサケヲ)登高圓野(タカマトノニ)
作(ツクル)
新(ニヒ)
心(コヽロ)
歌三首

左京少進大伴宿禰池主
(サケウノセウシンオホトモノスクネイケヌシ)

しろたへの
袖(そで)ふきかへす秋風(あきかぜ)の
いたくな吹(ふ)きそ
妹(いも)もこりけむ

左中辨中臣清麻呂朝臣
(サチウベンナカトミノキヨマロノアソミ)

ひさかたの
雨(あめ)も降(ふ)らぬか
雲隠(くもがく)り
鳴(な)きゆく雁(かり)を
留(とど)めかねつも

舍人親王(トネリノミコ)

山つとに
いざ行(ゆ)かな
ありつつも
春(はる)の山辺(やまべ)は
散(ち)りぬべきかも

大納言藤原朝臣
(オホイモウスノツカサノカミフヂハラノアソミ)

春(はる)の野(の)に
霧(きり)立(た)ちわたり
雁(かり)ぐもと
つれなき人(ひと)を
思(おも)ひつるかも

少納言大伴宿禰家持
(セウナゴンオホトモノスクネヤカモチ)

少納言大伴宿禰家持

天平勝寶六年正月四日氏族人等賀集于少納言大伴宿禰家持之宅宴飲歌三首

左兵衛督大伴宿禰千室

雪乃上尓雪布礼里伊夜之吉尓

民部少丞大伴宿禰祢村上

安良多麻乃登之波伎布礼等伊波布許等

左京少進大伴宿禰池主

春乃初乎等乎布乃古事尓

天平勝寶六年正月七日天皇太上天皇皇太后於東常宮南大殿肆宴時奏歌一首

礼記正義云孔穎達等撰五経正義之一禮記正義六十三巻大戴礼記八十五篇小戴礼記四十九篇 氣勝則凝而爲霜 氣之始寒 白虎通露者霜之始寒則變而爲霜 介雅雨與雪雜下曰霰 説文雹雨雪也從雨包聲 仙云仙覚 本文 露結爲霜 霜疑爲雹雪

播磨國守安宿王

伊奈野乃かつら乎手折けむ人のこよしも

右二十ノ三

伊奈野乃かつらを折けむ人のこよしも

右一首播磨國守安宿王

天平勝寶六年三月十九日置始連長谷攀花提壺酒到家持之庄門槻樹下宴飲歌二首

置始連長谷

やまとなでしこ

やまとなでしこ

わがせこやたれのやどにやどりゐてかへりみなくにわれをおもへる

大伴宿禰家持

同年三月二十五日左大臣橘卿宴于山田御母之宅時大伴家持賭時花作歌一首 然未出之間大臣罷宴而不舉誦

少納言大伴家持

やまぶきのはなをたをりかざしつつきみをかへさくいつとかまたむ

同年四月詠霍公鳥歌一首

大伴宿禰家持

このころのあつけきあまに

諸兄公の母

山田御母也

大臣罷宴而不舉誦

諸兄公宴をやめたれいあげ吟誦せずてやまぶきの花

やまぶきのはなをたをりかざしつつきみをかへさくいつとかまたむ

4312 4311 4310 4309 4308 4307 4306 4305

許乃久礼ハ此木乃山
乃茂山やけ葉十九の
ちかき二上山のこれ
くれ乃茂き谷へとも
よめり今心ハ家持我
中坐寒ぬ二上山を郭
公の鳴く聲をきゝて
こや来らむしもん
こうひやる心也今し
くらしも頬乃んと
はつ秋風涼しき夕
牽牛の心也そよめり
といひしなりとも
秋といへバ心ぞ痛き
秋ごとハ七夕の逢せ
ぬのれて心痛きこと

このくれのしげきをのへをほとゝぎす
なきてこゆなりいましくらしも

同年七夕獨仰天漢作歌八首

大伴宿禰家持

はつ秋風すゞしきゆふへとかんとぞ
ひもはむすびしいもにあはんため

秋といへばこゝろぞいたきうたてけに
はなになぞへてみまくほりかも

はつをばなはなにみんとしあまのがは
へなりにけらしとしのをながく

倫花ハあまりていハ花になそへてこゝに織女を花になそへ
てみまくほしきこと
天川おける花になんらし
尾花の咲にあひなんとて天の河の逢
中隔りけらしとぞ
へだゝりいへりとしいふ意也
秋風になびくかはへの
にこぐさのにこよかにしも
七夕の逢を思ひよろこぶ也

秋風になびくかはへのにこぐさの
にこよかにしもおもほゆるかも

あきされは霧立渡る
石並置かば踊石乃心に
やさしかはつきてみそれ
えんとも見安こハ石をと
小川で河の石を渡
秋風にいまかとて
七夕の手紐結びて
秋草におく白露の

あきされはきりたちわたるあまのがは
いしなみおかばつぎてみんかも

秋風にいまかいまかとひもときて
うらまちをるに月かたぶきぬ

秋草におくしらつゆのあかずのみ
あひみるものを月をしまたん

あをまかうでさへぬれてくゆかめ
可之
かもかづらにさよふけにつゝ

同年七月二十八日作歌一首

大伴宿祢家持

ヤチ矛
八千年かくをさをさとうてつぎこふ
さらんさきくあをにえらしつゝ

獨憶二秋野一聊述二懐作一歌六首

ヒトリオモヒテ　イサヽカ　ツムキヲ

兵部少輔大伴宿祢家持

玄人乃うてつぐこころいあきいさか
かもひとのきこゆるものそや

玄人乃神つき衣 袖着衣萩乃花色 秋風 黄 仙名 神 白 須藤未疑

玄人乃神つき衣袖着衣萩乃花色をとりつけ心但仙名神経衣、
万も神と同しめやすき色〳〵黄ゑみてをゝ黄葉、
後黄、ふく神白きの経小袖のことを白とゝいふそらのまゝ

ころもでの秋たちくるをしるきかも
さるの野もとみすゝきみだれ

みだれは裾過ゝ野可お注
あき野よ今こそ乃め
仙口ゝとこをまつのもこひかたみ
いもをこふとや妻のきぬ〳〵
神楽おもふ女
白きぬしぐれのふりてよるさむく
ころもでかたしきひとりかもねん

波疑野 依可里 安依 疑里

あさぢはらつゆをふみわけこゝろ
さへあきのゝ露にぬれつゝ
多のまし秋野
ゆくりなくをみなへしかもかくばかり
```
```

ますらおのよそひそこゝろさやけきを
むさぼりけんあきのをぎはら

天平勝寶七歳乙未二月相替遣
筑紫諸國防人等歌 采葉

同年二月六日防人部領使遠
江國史生坂本朝臣人上進歌
數十八首但有拙劣歌十一首
不取載之

國造丁長下郡物部秋持

かしこきやみことかしこみもゝしきの

右防人六十巻の口訣
かしこきやみことかしこみもゝしきの
仙曰今案此歌者
勅旨之辞明日之字
ゆふへには明日之夕
之義也此歌者
依拙劣不取載歟
但歌意者
雖然作者國造丁之
下長郡人也
従之下長郡人
之下脱丁字歟
若丁字
在郡名之下
歟

和我伊牟多祢乎
かえりいむとねをといむなしく

和我前麻
わがまへにこひらのむこつ

古比
こさゝくもたわすれとも

主帳丁雀王君若倭部身麻呂

仙曰此歌者
雀王那
主帳乃丁也
丁下脱名歟
若倭部氏
男丸乃名
歟

波奈
こきくのはなのさけるもおもほえず
波奈
波々
ちゝふをおもてこすらん

防人山名郡丈部真麻呂
波奈
佗古泥
已受祢乎
何為可
訪花之開而不
来家乎
仙曰案

花とハ親なとにかへり
こる業行のあまりの
ちかんとし師母ハ母を云
花ハさけと母ハちゝと
こゝこ年ちゝハ是より
こさ母ハ遠江にある
まれ川の母乃母
り遠江名所也とこ
ことゞもかゆはんハ言も
やかよハん乃意し
父母ハ花にもがもや
仙曰さゝごてゆかんと
さゝげてゆかん之義
佐野郡も遠江
父とハ父が殿のあたりへの
祇曰家ゟ云尋心ハ謌人

同郡丈部川相
等倍多保義　志留波　尓閇
とへたほみしるはのいそとにへのうらと
あひてしあらばことゞもかゆはん

佐野郡丈部黒當
知々波々　麻久良
ちゝはゝも花にもがもやくさまくら
たびはゆくともさゝごてゆかん

同郡生玉部足國
父母がとのゝしりへのもゝよぐさ
もゝよいでませわがきたるまで

長下郡物部古麻呂

後へをさすなり
もゝよぐさなれど百日ね
ざゝへこゝよめるにや
いでませハ初の意也　百
夜草とハ月草也　菊百夜草花陽殿にはさゝこつりは菊をぞうたへく
郡脈　百夜草とし夜草これなと稀なんのあたりのあたりけさと謂り
わかれまし京にさらんいつまとりこハいと忍をりあるこしあつりしにさ書あと
ゑを出腕もりてよ出持て旅ゆくハ旅ハ見つゝ忍ばんとさなへくるりん

和我　畫　伊豆麻母加
わがつまもゑにかきとらんいつまもが
たびゆくあれはみつゝしのばん

助丁　祇曰助丁ハ丁也
きこ依のかミよめる使丈
訳上丁ハ寺使と仙曰防人
人ホ立人全文の四十字を上
丁とす十八字を為下丁
おほきみのみことも賢と
仙曰いそにふりハ磯に
かまこうのはらわたる

同年二月七日相模國防人部領使
守従五位下藤原朝臣宿奈麻呂進
歌數八首但拙劣歌五首者不取載
之
助丁丈部造人麻呂
おほきみのみことかしこみいそにふり

ハ海原ぬるゝも我海月
やそくには難波に
是安云やそくには数多
乃國々ひろとは日の
ことゝ云ふ意八十
国の人は難波に集り
おそひが舟かざりて
出ん日を見ん人もがな
といふ意人も見ん
人也作者足下郡ニ六
相模の足柄下郡なる
上丁は兵人の還
なにはつによそひく
防人の諸國難波に
て舟よそひせて行
る今日出船すると
て

うのちるわるるちしくをとまそて

足下郡上丁丹比部國人

やそくにはなにはにつどひふなかざり
あがせんひろをみもひともがも

鎌倉郡上丁丸子連多麻呂

なにはつによそひよそひてけふのひや
いでゝまかるんみるおもなしに

同年二月八日追痛防人悲別之心作歌一首幷短歌

兵部少輔大伴宿禰家持

母と至る迄いくそ出立
追痛防人悲別之心ヲハ
此哥ら我どんく家持
て家持の深切なる也
ことのすて遠き朝廷
これはみかどおこ注
筑紫まかるる 是安云
其國乃敵をまもる也
をさへのきそとて
是安云 かぜきこ乎る
城郭也
いでむかひかへりみせず
敵に出向ひて身命
をかへりみすとゝ
いさみたるさい 軍兵之
ねぎたまひ是安云ねぎは

すめろきのとほのみかどゝしらぬひの
つくしのくにはあたまもるおさへのきそと
きこしをすよものくにゝはひとさはにみち
てはあれどとりがなくあづまをのこは
いでむかひかへりみせずていさみたる
たけきいくさとねぎたまひまけのまにまに
たらちねのはゝがめかれてわかくさの
つまをもまかずあらたまの月日よみつゝ
あしがちる難波のみつに大船にまかい
しゞぬきあさなぎにかこととゝのへ

あひて
ますらをたく 紀の国
ゑこし防人こまて統
宗よらをよのかと
月日よみつゝ 二つ
らいつまとと年
蹈をとかうへてく
行りちる 若狂義
つし但人あこちいさ
き口ふし 一勅く
あとらいく 今ハ
とかのいくし
、ゆき行ての 行
そのこゝろこゝの字
行の字みの字ゆき
まきこそくも 事き

しほにかぢひきをり あともひて
こぎゆくきみは なみのまを いゆき
さぐゝみ まさきくも はやくいた
りて おほきみの みことのまにま 大
ますらをの こゝろをもちて ありめぐ
り 事し をはらば つゝまはず かへり
きませと いはひべを とこべにすゑて
しろたへの そでをりかへし ぬばたまの
くろかみしきて ながきけを まち
かもこひん はしきつまらは

みことのまにま 王命
のまにまにおのり
いさみたるたけき
いくさとねぎたまひと
まけのまにまに
やはた作せのまにか
いさみたけき心を
持く統率する
よりてこゝの義
防人をすと 又要云
神より手き着て
おかきけ 欲く心
そしきこれ
ますらをのゆきとり 仙

反歌

伊留氏

ますらをのゆぎとりおひて 出てゆけば
わかれをおしみ なげきけんつま

とりがなく あづまをとこの つまわかれ
かなしくありけん としのをながみ

おいくとは 勅には 督乃長 下居
東乃兵士なれば 仙 府

を朝貢乃ちそこに泊りて防人ども
いつる船ども並びみな仙法ありてする
うりのくにつかへまつるとて
乃ち月を経て家持ら今共部を率ゐて
れに渡るを見て
海原をとほくわたりて
仙曰ゆきて
こと
今ゆく新防人の
相替りてにゆく
人乃ちいつ乃海上に
陸しおさきもり
けそと
さきもりの情にき
祇曰葦菓曰檝十丁

同年二月九日作歌 三首

大伴宿禰家持

海原をとほくわたりてゆくとも
うるはしすめろきかみの
今かわる
替
みことかしこみ
うかりうへなみをそねね
さきもれりとまをすつげよね
伊豆手支祢

そそくる舟をみる
舟こぎ乃檝二つを
つとこうそく又舟、伊豆國ら乃神つ船よ伊豆生舟こ
とつくるそ又舟、伊豆國ら乃神つ船よ伊豆生舟こ
重東仙物とらりあまさくる船の法、奥後物よ生伊豆舟の
法い童蒙物よ生つ日本紀第十三應仁天皇五年冬十月伊豆國
よ伸せく、もそ十丈乃舟や作りて、試る海のうへにうかべて
らくゆくそうそうこと、枚かまる名を枯野とい、軽野にいく人
乃記之童蒙 八十三ウ

同年二月七日駿河國防人部領
使守従五位上布勢朝臣人主進
歌數二十首然拙劣歌十首者不
取載之
上丁有度部牛麻呂
ちつくり乃ーちのいるまに父母うり
ちつくり乃ーちの
ふれ父母乃出立ちみつつ
涙こそ流
いそし悔

ものそずきまくいやそくやさき
助丁生部道麻呂（スケノヨボロイクベノ）
まみけめもも（牟良自加己藤）
ちそをそるれてくりかえし
刑部虫麻呂（オサカベノ）
くふめでるうちうちけはやまめうち
和比（利久）
ひはまくまくにいそしくまくこれ
川原虫麻呂
ちそそくがそくまくねつくする
みけくく白玉うちてくまくよ

仙口今くく白玉（河領巾）を倚る白玉（乙女ら河
泥ねのまき（えるふ）玉巻き巻く白玉
ちつそのみそりの
八重おみそりの里
ほそくそ（乙女ら）ゆきそそ
ねいりうまくる
玉巻持ち泥ね
まきそそらかめく
かめてい祝ひてほる
枚を祝ひてほる
乃ちく破壊せねく
母の命のりせそし
せとく（乙女ら）刀自そ
女乃越乃尼（かめる）

（義衣で表を）
丈部足麻呂（ハセノタリ）
道
ちちふみえりのさとにちそかそ
るりもちちくまくてぬくし
坂田部首麻呂（サカタベノオビト）
（實米盛）
まきそそらかめてしてるうのごと
いまをそそらく（刀自）おめやそりせと
玉作部廣目（タマツクリベノヒロメ）
（於米イ）
わろくひくひとおめやそこひみて
こめちやすくんわうみりもし

商長首麻呂

わすれこのやどにおほきこわすれぐさ
わがもつきくにわすれえぬかも

春日部麻呂

和伎米志故等

わすれぐさわがもつやどにうゑたれど
きけどもしるしなきものにしあるを

丈部稲麻呂

佐久安礼天

わすれぐさかきもしらすつくすとも
わすれしめぐさ見つつしのはむ

古度波曽氣筆波是

わすれぐさかきもつみてむいとまあれや
ねもころもふかきこひをわすれむがため

右一首

仙気わすれぐさかきもつみてしかはわすれむといふうちよりすれどもいよいよこひのまさるものなり

同年二月九日上総國防人部領使少目従七位下茨田連沙彌麻呂進歌數十九首然拙劣歌六首者不取載之

國造丁日下部使主三中之父

伊用

いへかてにこしにつまおきくるしくもふりてをれどもいねてこしものを

國造丁日下部使主三中

多可ねろをわかれてきとわれ

ちくさのかくおれてい所在幸ひまさきくてとまうすことを仙気父母祖の頂を拝して叫び幸あれてひたすらに祈ることを

同年二月九日上総國防人部領使少目従七位下茨田連沙彌麻呂進歌數十九首然拙劣歌六首者不取載之

國造丁日下部使主三中之父

伊用

いへかてにこしにつまおきくるしくもふりてをれどもいねてこしものを

國造丁日下部使主三中

多可ねろをわかれてきとわれ

ちくさのかくおれてい所在幸ひまさきくてとまうすことを仙気父母祖の頂を拝して叫び幸あれてひたすらに祈ることを

同年二月九日上総國防人部領使少目従七位下茨田連沙彌麻呂進歌數十九首然拙劣歌六首者不取載之

國造丁日下部使主三中之父

伊用

いへかてにこしにつまおきくるしくもふりてをれどもいねてこしものを

國造丁日下部使主三中

多可ねろをわかれてきとわれ

たらちねの母に別れて
母とわかれまこと我
旅のかりほにやすくねんかも
とし

たびのかりほにやすくねんかも
助丁刑部直三野

4349
もゝくまのみちハきにしをまたさらに
やそしますぎてわかれかゆかん
帳丁若麻績部諸人

もゝくまのみちハ来し
百乃隈ゝ多き道の
陸路ハ来しを又更
ニ八十嶋をこぎゆきて
別ゆくべきなるを歎
遠く来てまたそこより
乃海路をとり別る也

4350
にはなかのあすはのかみにこしばさし
あれハいはゝんかへりくまでに
阿須波
帳丁若麻績部諸人

にハなかのあすはの
袖中抄云上総ニ阿須波と云神ありと云此地のゝく
ちいさき柴を立てわたすことに云り上総乃防人の歌也
悔離別こゝろをよめる歟又は妹ゆさめやいちよるときあす
は此神ニ小柴さしもいはゝん　古林良枝まとも川用　又安云阿
須波乃神ハいかなれ神と足ら乃神に云ゝし小柴さしハ釜の
上ニ松榴乃柴ふさしてとも向る也　仙抄大同小異　右説の内袖中抄可採
良枝説もこれ子用ゐるにや　此哉　それもよしあすハの神なり
さすゝ柴乃きかりもこれハ庭つきの時連寄するも名ならせり

4351
たびころもやへきかさねていぬれども
なをはださむしいもにしあらねハ
望陀郡上丁玉作部國忍
夜倍伎　イ夜豆伎

たびころもやへきまね
夜豆伎可佐祢弖と
旅衣をおほきまね
てねくとも妹にあらね
さむしとそ　望陀郡上総

4352
みちのへのうまらのうれにはほまめの
からまるきみをはかれかゆかん
宇万良　波保麻米　波可礼
天羽郡上丁丈部鳥

みちのへのうまらの
宇万良師説うばらと
よむ一仙覚うまらそ
うばらをうちあハせよ
豆ニからむれかゆかんと
離れかゆかんと足安まう
りしの常ニ追豆也而来

4353
いへかぜハひにひにふけどわぎもこが
朝夷郡上丁丸子連大歳

伊へことともとくくるひともる
長狭郡上丁大部與呂麻呂
多知許毛 多知
一ともことしのこきふあひそし
いとしこころもわすれせぬかし
武射郡上丁大部山代
余加波我多
よそかのみそてやわてもかかるよ
くしぬよえゆるこまもるくふ

聖武帝天平十二年十二月よりこのくに上総安房のくにを
おとりまもるうちにれいは朝夷長狭もいまよ上総国より出連なる
へし山はえ安房国を割りとりてくにつくりたまふ今のいとも
ようにのみそやわてもわれもん雑徭はさしてあめよろふ
よろこの命をもてそいはふ雑徭 山邊郡上丁物部手刀良
わろもれうてともかてわかふ
なまこころをわすえぬかし 市原郡上丁刑部直千國
うてしたわるよもろうしこ
いりきの命もこいりてわきもこら
仙宮の命といふみそ 種淮郡上丁物部龍
見安云廿乃組尺 仙
神しこりふ神もたふくしとそゆふこと

おわりまでのことく一二
又安二わのことくして
こゝろえ
也

おわりまでのことくして
古奈和婆イわぬ
わぬくりけまくしい一二ゐいも

長柄郡上丁若麻績部羊
ナガラ ワカラ ヒツジ

歌辛加流
けくへう毛むるみねのいうも
因辛可毛

つくへまつりてくへむくも

同年二月十三日陳ル私ノ拙懐ヲ歌一
首并短歌 兵部少輔大伴宿祢家持

天皇
すめろきのこをきこしめすや
乃依夜氣久
雅波のくにはしきりてしも
見能等毋之久

ふ舳を向んとし
すめろきのきこしめす代
そいふ詩人の喜ふ雅波
雅波の国仁徳の
雅波の
いにしへ
叫ぶくわうきの
白を切下のやまを
山線が起て心面代を
神かくしと貴ふ
又乃
又乃
てゐ
又る
ゐ
雅波の

今をひさしうて尾
ハのほそしほきこ海
うちゆの安あの村多
しさいさこいり松
やへする陸の峯
ーりゆし神小
陸を頭する心同
そくにうさて仙
曰くふ海てこ
おみけ御食し天
方治賜の膏進心
いさりたり 漁鈎
うきくく仙曰うて
もし安多きり
おきろあまりも仙曰

いて海原(ウナハラ)れいさくあその中へする
波良良
がうまあまよそくにうきて
おみけにたりまつとちこ
伊射里都利 首伎太久 於藝呂
いさりたりうきくもいきろ
あまこりも 已伎婆久
こきつもゆそきうも
守倍之
これうし秋代ゆもめそも

反歌

松たいまさりのあり雑賀の海
をする今やにさうめすそ
海原ゆけさえつけうちる

あめとにうしへぬくなもうゆ

同年二月十四日常陸國防人部領
使大目正七位上息長真人國鳥進(ツカハシ)
歌数十七首然拙劣(ヲ)歌七首不取載
之(ヲ)
茨城郡若舎人部廣足
今(ナニハ)汝はよ今よおろすえやうぬさ
いゆしこきねしいとにつけこう
さきよりふーてんさきにいこりいもり
あるへさこをいてすきぬりし
そしもろこゆけさりとこーゆ(以示之也)

あかねさす 君が心を 忘れかねつも

右一首 信太郡物部道足

ぬばたまの 夜渡る月を 幾夜経てか 見し

右一首 茨城郡占部小龍

うつせみの 人目を繁み 石橋の 間近き君に 恋ひわたるかも

右一首 那賀郡上丁大舎人部千文

うつせみの 人目を繁み 石橋の 間遠くとも 我が通はむ

右一首 久慈郡丸子部佐壮

我が背子が 着る衣薄し 佐保風は 疾くな吹きそと 妹は言へども

右一首 久自我波 佐氣久 阿利 麻呂

ぬばたまの 夜渡る月を 留めむに 西の山辺に 関もあらぬかも

右一首 那賀郡上丁大舎人部千文 由等許

ぬばたまの 夜渡る月を 幾夜経てか 我が待つ妹が 家の辺りを

右一首 佐由流 可奈之 家 可奈之 祢

行〳〵礼なり可畏神の祇曰千父〻の尊く掌陸方防人之〻〳〵より仍て〳〵
山をも渡り河をも渡り可畏神と云ハ口ありと云ふ心なり須米乃
こゝハ野民〻民方帝徳小き〻うみ〳〵す尊なれ共風のまにまに
小民の幸を祈〻もとめ〻まもるべく之命小き〻うして荒ぶる
おとゝ鹿島の神まねきをきて国ゝ之安全須米良美多伎ハ民〻保
証説皇御軍〻尊の心

助丁古部廣方

多ちいなれ共て〳〵ゐのりきり
ばくその母まもこゝろをなのめるこ
倭父部可良麻呂

行さかる民みちうしまつりこす
あまねくゆきわたるまで
そかる不破のせきこそわいゆく

行〳〵なもてやりくる
仙旨行〳〵おこゝろけ
くこゝろきあるもこと云
〳〵やりくるこゝろハ立
芸き男もし立そくる破のせきをもこえゆくこと
むれたゝめつゝのさき
てるの瓜と云り仙旨云ハ防人を旅ばる〻をされくる時のうれハ
たゝのさゝやかなるやちかれてゐるかのうれしく
とゝ我ハ祝ひやさんとゆりまくく給つるんとく山等仙旨
よハ兵柄の所仮多きうちと云ハ〳〵ハ防守の〻まりいまくちり
み祝りをさゝくうれしくれいはやちせ〳〵とて横目と
せすまりゆく〳〵行〳〵なもてやりくるこゝろハ武さ
くこゝろ立やりくるこゝろと云るゝ
玉葉山流ハおく〳〵おこゝろ防人の
くりふみやおもしく防人ハ百多や

牟麻能 都米
むれたゝめつゝのさきに
行れハこゝろくハさけくとま
佐利
ず須
をす行〳〵なもてやりくるこゝろ

同年二月十四日下野國防人部
領使正六位上田口朝臣大戸進
歌數十八首但拙劣歌七首者不
取載之
火長今奉部與曽布

ありがよりみかくておねさの
之許乃 美多氏
きこれをみてそといてこまれそ

火長大田部荒耳

あをはたの
はけのかみをいのりてさつやねさ
はそらみつやまとをさしていくわれは

火長物部真嶋

或説云 衆也 将 軍衆
火長 炬火狼煙者
火之光遥見之時挙此火
部内姓也今多有此姓
多加久利云
其汚稽与曽布
云此両人同国之
使部所以副此
防人遣之歟
日本紀
神功皇后摂政
摂政 摂 政 摂
摂政元年二月
条云 皇后欲
征討新羅之神
財 宝 神 財 上
刺 針 也

まつかせに
なみたちぬへみ
伊波妣等

麻都

まつかせに
なみたちぬへみ
わきもこを
みむかのやまを
こえてきぬかも

寒川郡上丁川上臣老
サムカハノ カミツコヲロ カハカミノオミノホツエ

多々理之母已呂
阿毋志々

多妣由伎

ひのもとの
やまとのくにの
あやにともかしこきかもよ
皇祖
天皇乃御世乎
阿毋志々

阿毋 乃自。

うのはらや
ひかりたつみて
かへりみすれば
月かたぶきぬ

美都良

多麻

阿波

津守宿禰小黒栖
ツモリノスクネヲクス

都賀郡上丁中臣部足國
ツカノ カミツヨホノ ナカトミノ

都久比

須良トカ

阿毋志志

おもしろく
きよくさやけく
あきらけく
おせるつきかも

4383　4382　4381　4380　4379

は母刀自　母刀自に同く
毋刀ん安云みつの中
ひんつの中也玉乗りゆきゆくともハおつくりの中ありし緊中珠のやう
本文之法華経より出たると
はくひ絵ハすくハ也けるも仙田はくハ月法乃月としひの八月ねくすくハ也け
とるとハるとハ也けるこ也棄わすれせすをもいふれせすくとくもハ也け
しら波のよする浜へよ
やたひ袖ふるハ八たひな
せ路のわかれを八と云
あまたゝひ袖ふりて
名残を惜むなり
なにはとをこきてゝ見
難波津より伊駒の高
根乃雲を眺望之言
かみさふる山突出たれ
神さひたると云

しあれすしハわすれせなふかも　西奈布母

足利郡上丁大舎人部祢麻呂

しらなみのよするはまへにわかれなは
いともすへなみやたひそてふる

梁田郡上丁大田部三成

なにはとをこきてゝみれはかみさふる　奈尓波刀　己岐　泥氏
いこまたかねにくもそたなひく　伊古麻　多可祢

くにくにのさきもり
諸國乃防人難波に
より筑紫へ出船すれ
ハ人〻わかれをかなしふやう
をおもふこゝろに出立
にあるや
ふたほかみあしけ人なり
仙台ハ二神ハ二心
おもふにあしき也
けいあたゆまひあしき也
いとこハあしくひやまい
いこふハ二重魂惡き人
也賂のことに協かに
らせしれハ不納く
ほ又防人にさすと
津の國の海の渚よ

河内郡上丁神麻續部嶋麿呂

くにくにのさきもりつとひふなのりて　具尓ミ　佐岐毛利
わかるをみれはいともすへなし

那須郡上丁大伴廣成

ふたほかみあしけひとなりあたゆまひ　布多冨我美　阿志氣　阿多由麻比
わかするときにさきもりにさす　和我　佐伎母里

鹽屋郡上丁丈部足人

つのくにのうみのなきさにふなよそひ
たゝしでもときにあもかめもかも　多志泥毛　等伎尓　阿母我米母

同年二月十六日下総國防人部

領使少目従七位下縣大養宿禰
浄人進歌數二十二首但拙劣歌
十一首者不取載之

助海上郡海上國造伊甚臣雄大理
阿加等伎 加波多例等伎 之麻加伎
ここもかもかれもかもとも
葛飾郡私部石嶋 忍流 撒土
由古佐枳尓 奈義奈等
古平等 都麻平等 之麻之 奈理
結城郡矢作部真長

千葉郡大田部足人
知波乃奴乃 加之波 保保麻例等
ちくさのぬのこのてかもかれもかもとも
他加枳奴

心いかさるまき事ともあやまち悪きことを雪くそそるくきねるとこ
ろにとゝまりてよ
仙口ふしとゝ(ご)様とつゝ
ぞくさいのしるしにゝ
家の嫁ごとゝさゝあ
云やうゝ真の様ゝ
業様ごつゝとゝ
ちるもゝかゝ真の
様かゝりゝそ
とゝ母のゝゝ白波
乙女ゝおそちゝゝ
ちけくゝなもさゝ
東かゝとゝ日和のよ
きまゝとゝ云ゝゝ
ちくゝゝきまちるゝ
ゝせゝまちゝゝ

多治比等 弊等
古部蟲麻呂
とゝとゝとゝまりぬゝゝのゝ
きせゝころゝかあつゝきゝゝ
印波郡丈部直大麻呂 歳十一
志保尼 敝古祖 小波志久女
きちゝゝねゝのゝゝこゝきまゝまゝゝ
ゝせゝまちゝゝたゝゝくゝ
猪鳥郡刑部志加麻呂
牟婁他麻乃久留 小久和
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
去去里 阿用久奈米
ゝとゝとゝゝゝゝゝゝ

小し訪人ゝゝゝ云
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

結城郡忍海部五百麻呂
ゝゝゝゝゝゝ須奈牟
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

阿米都之ら
埴生郡大伴部麻與佐
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

うたてもふきこぐうん

結城郡雀部廣島

おもきみのみこととにされいちじるを

佐倍波

いそいへとをきてまをすをきふを

相馬郡大伴子羊

おほきみのこころのみよさねわしんをおもふこのよを

由義

同年二月十七日獨惜龍田山櫻花歌一首

兵部少輔大伴家持

多都多庭麻

うつせみもかくのみならしたまをぬきつらねつつをらむものを

同年二月十九日獨見江水浮漂賓悠悵貝玉歌一首

兵部少輔大伴家持

許都久良波奈

ほりえこぎあさりするあまをとめらかいりのまでせいにこぐみゆ

同月在館門見江南美女作歌一首

兵部少輔大伴家持

和我可敝流

えりてせいしつのおのれそかおもひてるまでこぐいそしきつま

同年二月十九日為防人情陳思

カミノヒラク

ハ我をうつくしと思ふ妻をおもきみのみことは

佐倍乎

倍旨みことにされこいまつるあれは

こいまつるあれは

也吉波

やすいもねかてきみにこふれは

門会而

かどでをすれはあれ父母をおもふ

てまつりてとうんに

いそいへとをきてまをすをきふを

たほきみのこころもつて

王命を

人ふつてもをわれ

まんとおもふ

作歌一首并短歌 兵部少輔大伴宿禰家持

おほきみ(大王)の　みことかしこみ　もののふの　情(こころ)(大夫)も　おのが(各)じし　いはふ(斎)べき　門出(かどで)(門出)と　すれいそ(群)も　ちはや(千早)ぶる　神(かみ)を(乎)祈(こ)ひ　ことむけ(言語)て　いや(好)遠(とほ)に　里(さと)を(乎)離(さか)り　いや(弥)高(たか)に　山(やま)を(乎)越(こ)え　いや(弥)遠(とほ)に　国(くに)を(乎)隔(へな)りて　ありつつも　見(み)ましし妹(いも)を　あらたまの　年(とし)の(乃)緒(を)長く　相(あひ)見(み)ずは　いかに(何)あるべく　思(おも)ほえて　かつ(且)は(波)恋(こ)ひつつ　かつ(且)は(波)嘆(なげ)きつつ　ぬばたまの　夜(よる)の(乃)寝(ね)覚(さ)めに　ただ(直)一人(ひとり)　さ寝(ね)る(宿)我(わ)が(和我)袖(そで)(佐禰)に　なまじろき(多頭)　風(かぜ)(可是)と(登)共(とも)に　来(き)(吉)む(牟)と(登)言(い)(伊)ひし(之)君(きみ)(伎美)が(我)　言(こと)(許登)の(乃)葉(は)(波)の(乃)　いちしろく(伊知白久)　出(で)(伊)で(弖)来(こ)(許)ぬ(奴)かも(可母)

反歌

うちなびく　春(はる)(波流)の(乃)柳(やなぎ)(夜奈宜)と　我(わ)が(和我)見(み)(美)し(之)人(ひと)を(乎)　都(みやこ)(美夜故)に(尓)　やりて(遣而)思(おも)ひ(比)そ(曽)我(わ)(和)が(我)

為(ため)の(乃)　情(こころ)(許呂)尽(つく)(都久)すも(須母)

防人(さきもり)に　立(た)つる(多都流)朝明(あさけ)の(乃)　金門(かなと)(可奈刀)に(尓)は(波)　手(て)(弖)も(母)触(ふ)れず(不礼)　寝(ね)(奴)る(流)夜(よ)(欲)ぞ(曽)多(おほ)き(伎)

右(みぎ)の(乃)件(くだり)の(乃)歌(うた)(哥)は(波)　兵部少輔大伴宿禰家持(やかもち)　聚(あつ)めて(而)之(これ)を(乎)作(つく)(都久)る(流)

防人(さきもり)の　情(こころ)(許呂)を(乎)　思(おも)ひ(比)やる(夜流)　歌(うた)(哥)

春霞(はるかすみ)　流(なが)るる(流)(奈我流流)(流)　天(あま)の(乃)川(かは)(河)　泉(いづみ)(伊都美)の(乃)(乎)　渡(わた)(和多)る(流)舟(ふね)(布祢)の(乃)　舵(かぢ)(可治)を(乎)無(な)(奈)み(美)　いたづら(徒)に(尓)　行(ゆ)(由)き(伎)(可祢)て(弖)(多)む(牟)かも(可母)

右(みぎ)の(乃)件(くだり)の(乃)歌(うた)(哥)は(波)　兵部少輔大伴宿禰家持(やかもち)　聚(あつ)めて(而)之(これ)を(乎)作(つく)(都久)る(流)

防人(さきもり)の　悲(かなし)(可奈之)び(比)を(乎)　述(の)(能)べ(倍)て(弖)　作(つく)(都久)る(流)歌(うた)(哥)

今日(けふ)よりは　顧(かへり)(可敝利)みなく(奈久)　大君(おほきみ)の(乃)　醜(しこ)の(乃)御楯(みたて)と(登)　出(い)(伊)で(弖)立(た)つ(多都)我(わ)(和)は(波)

右(みぎ)の(乃)件(くだり)の(乃)歌(うた)(哥)は(波)　兵部少輔大伴宿禰家持(やかもち)　聚(あつ)めて(而)之(これ)を(乎)作(つく)(都久)る(流)

天地(あめつち)の　神(かみ)(可美)を(乎)祈(こ)ひ(比)て(弖)　幸(さき)(佐伎)く(久)あれ(阿礼)と(登)　白(まを)(麻乎)す(須)(須)ま(麻)(須)ら(良)(須)に(尓)　母(おも)(於毛)の(乃)(乎)(能)　白(まを)(麻乎)す(須)(須)ま(麻)(須)ら(良)(須)に(尓)　妻(つま)(都麻)の(乃)(乎)(能)　白(まを)(麻乎)す(須)(須)ま(麻)(須)ら(良)(須)に(尓)　我(わ)(和)が(我)(賀)(賀)　取(と)(刀)り(利)(利)見(み)(美)(美)る(流)(流)　我(わ)(和)が(我)(賀)(賀)　持(も)(母)ち(知)(知)る(流)(流)　真弓(まゆみ)(麻由美)を(乎)　引(ひ)(比)き(伎)(可祢)て(弖)　堅(かた)(可多)め(米)(米)　我(わ)(和)が(我)(賀)(賀)　取(と)(刀)り(利)(利)見(み)(美)(美)る(流)(流)　我(わ)(和)が(我)(賀)(賀)　持(も)(母)ち(知)(知)る(流)(流)　真弓(まゆみ)(麻由美)を(乎)　引(ひ)(比)き(伎)(可祢)て(弖)　堅(かた)(可多)め(米)(米)　今日(けふ)(家布)(家布)の(乃)(乃)　我(わ)(和)が(我)(賀)(賀)　射(い)(伊)る(流)(流)　的(まと)(麻刀)に(尓)(尓)　当(あ)(安)たれ(礼)(礼)　中(あ)(安)たれ(礼)(礼)　この(許乃)(許乃)　我(わ)(和)が(我)(賀)(賀)　放(はな)(波奈)つ(都)(都)　矢(や)(夜)は(波)(波)　外(そ)(曽)すな(奈)(奈)　中(あ)(安)たれ(礼)(礼)

右(みぎ)の(乃)件(くだり)の(乃)歌(うた)(哥)は(波)　兵部少輔大伴宿禰家持(やかもち)　聚(あつ)めて(而)之(これ)を(乎)作(つく)(都久)る(流)

防人(さきもり)の　悲(かなし)(可奈之)び(比)を(乎)　述(の)(能)べ(倍)て(弖)　作(つく)(都久)る(流)歌(うた)(哥)

今日(けふ)よりは　顧(かへり)(可敝利)みなく(奈久)　大君(おほきみ)の(乃)　醜(しこ)の(乃)御楯(みたて)と(登)　出(い)(伊)で(弖)立(た)つ(多都)我(わ)(和)は(波)

右(みぎ)の(乃)件(くだり)の(乃)歌(うた)(哥)は(波)　兵部少輔大伴宿禰家持(やかもち)　聚(あつ)めて(而)之(これ)を(乎)作(つく)(都久)る(流)

天地(あめつち)の　神(かみ)(可美)を(乎)祈(こ)ひ(比)て(弖)　幸(さき)(佐伎)く(久)あれ(阿礼)と(登)　白(まを)(麻乎)す(須)(須)ま(麻)(須)ら(良)(須)に(尓)　母(おも)(於毛)の(乃)(乎)(能)　白(まを)(麻乎)す(須)(須)ま(麻)(須)ら(良)(須)に(尓)　妻(つま)(都麻)の(乃)(乎)(能)　白(まを)(麻乎)す(須)(須)ま(麻)(須)ら(良)(須)に(尓)　我(わ)(和)が(我)(賀)(賀)　取(と)(刀)り(利)(利)見(み)(美)(美)る(流)(流)　我(わ)(和)が(我)(賀)(賀)　持(も)(母)ち(知)(知)る(流)(流)　真弓(まゆみ)(麻由美)を(乎)　引(ひ)(比)き(伎)(可祢)て(弖)　堅(かた)(可多)め(米)(米)　我(わ)(和)が(我)(賀)(賀)　取(と)(刀)り(利)(利)見(み)(美)(美)る(流)(流)　我(わ)(和)が(我)(賀)(賀)　持(も)(母)ち(知)(知)る(流)(流)　真弓(まゆみ)(麻由美)を(乎)　引(ひ)(比)き(伎)(可祢)て(弖)　堅(かた)(可多)め(米)(米)　今日(けふ)(家布)(家布)の(乃)(乃)　我(わ)(和)が(我)(賀)(賀)　射(い)(伊)る(流)(流)　的(まと)(麻刀)に(尓)(尓)　当(あ)(安)たれ(礼)(礼)　中(あ)(安)たれ(礼)(礼)　この(許乃)(許乃)　我(わ)(和)が(我)(賀)(賀)　放(はな)(波奈)つ(都)(都)　矢(や)(夜)は(波)(波)　外(そ)(曽)すな(奈)(奈)　中(あ)(安)たれ(礼)(礼)

右(みぎ)の(乃)件(くだり)の(乃)歌(うた)(哥)は(波)　兵部少輔大伴宿禰家持(やかもち)　聚(あつ)めて(而)之(これ)を(乎)作(つく)(都久)る(流)

おもしろきよのなかをなべてかなしくおもほゆ
いへおふことをねたむにうつつなくうつつもなくてすぎぬるものを

同年二月二十二日信濃國防人部領使上道得病不來進歌十二首
拙劣歌九首者不取載之

國造小縣郡他田舍人大隅

かくしてすべなきものを小竹の葉のみだれてわれは思ふといはなくに

主帳埴科郡神人部子忍男

おもしろきよのなかをなべてかなしくおもほゆ
いへおふことをねたむにうつつなくうつつもなくてすぎぬるものを

同年二月二十二日信濃國防人部領使上道得病不來進歌十二首
拙劣歌九首者不取載之

國造小縣郡他田舍人大隅

かくしてすべなきものを小竹の葉のみだれてわれは思ふといはなくに

主帳埴科郡神人部子忍男

ちぢにおもふこころのなぐさもるかとかにもかくにも
いふのちそおもひぐまなる

小長谷部笠麻呂

おろかなることのもとゐを古與伊江波之
おひくやまをこえてきぬらむ

同年二月二十三日上野國防人部領使大目正六位下上毛野君駿河進歌數十二首但拙劣歌八首者不取載之

助丁上毛野牛甘

あらし小縣君奴儀波
ちぢにおもふ神のこと波
信波乃河波の河波に禊ぎおしつれどもちはやぶる神はゆるさず
ちはや人宇治のわたりに
妻恋に鹿鳴く山を越えて来ぬらむ

王令をかしこみ
して防人に発たんとする君
妻子どもかしこにここだ
泣くらむ山を越えてと

朝倉益人

和我伊母古我 筆

わがいもこがしろのひなでをつけし紐
いとうるはしもわをこふらよ

大伴部節麻呂

和我伊波呂赤 之

わがいろはうつろひもなくきみがため
いのちをしけやしきよこしふ

他田部子磐前 宇須比

ヲサダノコイハ

いなむしろさりうすしのさやをこしふ

和狼良 延

いもこにわすえぬるかも

同年二月二十三日陳防人悲別之情歌一首并短歌四首

兵部少輔大伴宿祢家持

大玉

おおきみのまけのまにまにさきもりは 島守
和我 波々 藤波

わがをもわれもそれをのみ
美母

みことにもよりてなすらをみおけるさ
知々 能未

ちちのみのちちのみことを
比氣 乃多婆

ひけのうへゆきくるしけのうへゆ
可胡自母乃

あまりなけきのこりくからもの

ふりさけみれば
吾子
春日なる
三笠の山に
出でし月かも

今日
あひ見ずは
恋ひしくあらじ
麻世渡イ
君が齢
若草
の
数にもがもな

春鳥
うぐひすの
鳴くを聞くなへ
梅の花
我家の園に
散りくるかも

天皇
すめろきの
神の命の
敷きませる
四方の国には
山川を
清けくさやに
見はるかし
国はしもよし
人さはに
満ちてあれども
高照らす
日の皇子
伊多久流
神ながら
神さびせすと
葛城の
高天の原に
八百万
千万神の
神集ひ
集ひいまして
神分ち
分ちし時に
波昌ろ
天の下
四方の人の
大御食に
仕へまつると
参赴く
出立
平可之伏
伊多久流
波昌ろ
和我
おほきみの
命畏み
天離る
夷辺に
出でて
我が来れば
昼は
日の
暮るるまで
夜は
夜の
明くるまで
大口の
真神の原に
旅寝して
思ひ
わづらひ
いはまくは
ゆゆしくあるが
言はまくも
あやに
かしこし
吾が
大君
皇子の
命の
馬並めて
三笠の山に
宮柱
太敷き
立てて
御殿を
高知りまして
朝ごとに
御言問はさぬ
日
居ても
思ひ
わかりかねつも
うちひさす
宮にあれば
出でて
我が
眺むる
山の
木の
葉さへ
春日の
茂き
盛りに
思ふどち
手折りかざせ
遊ぶらむ
その
高円の
野辺の
秋萩
この
頃の
暁露に
にほひ
散るらむ
その
心
ばへを
見ず
て
我が
帰り来れば
荒野と
なりぬ
立ち
平すと
踏みし
その
庭
見れば
悲しも
百足らず
八十隅坂に
手向
せば
過ぎにし
人に
また
逢はむかも

おくすめろ乎（スメロ）吾皇神（アスメ）也吾君吾皇孫尊（スメミマ）
なりいつくりまして
みまのむこおそこ
やうやねさ八十梶
貫足おりくうつを
わいこきそれと我
こきせりこせを
家人乃いえのひと
我平安乎出船乎
家人の祝まつらむ
らんをゆくさ
みそゆくさ

反歌 伊波倍

いへびとのいはふらんこそ
いへびとのいはふらんこそ
ゆくさくさ
みそゆくさくさ

右二十五首

宍礼使ふい家つとを
いきこえきこりこせを
二首宍見て松浦
浪の渡いきまきりう
ちよすとそと
家つとふ見松浦
ゆきて松浦
ゆきて松浦
ゆきて松浦

部領防人使ふ
防人部領使と同
まてうふう
仙日松大刀

同年二月二十日武藏國部領
防人使掾正六位上安曇宿禰
三國進歌數二十首但拙劣者
不在載之

上丁那珂郡擔前舍人石前之妻
大伴真足女

北里乃弊流大浪
多可久

麻久良 多之イ知已志

まくらふやうにさやかなる

西呂 都久

ところまきこんにくれもころを

助丁秩父郡大伴部小歳

宇 都久之氣介

おおきみのみことをうつくしさ

麻西 波奈礼

まことてなれ 玉ゆらにゆく

玉帳荏原郡物部歳徳

母之乞 義流乃須母

きみをてふらりやこんこよひもや

毛母也

いへなるいもなけくらむ

妻椋椅部刀自賣

くさまくらいやなるなせい

伊波

いそなるれいいとこなすや

豊嶋郡上丁椋椅部荒虫之妻

宇遅部黒女

波賀之 加不良

うつこまとやまれかえしらりゆく

加志由加

しもれとやまゆゆやん

荏原郡上丁物部廣足

麻已 於知母

わかのかみまてをさまとされ

布礼奈尓

まりてあれこそかおもふ

わかのかみまてをさまとされ

まりてあれこそかおもふ

片山椿いまだ花乃一枝も

折れ門の春の美花を

ふく深み淵のみなそこ我ぬしをおもふこころもしら波の
せわるまれをいかゝはせんとこたへしかなもはおもひ
ます子ごもれとこたふ女
又一説椋鉢の門の美花

伊波呂 埴之布
いそろふいはふ家こそ安雲
仙曰いそろふ家こそ安雲 古布志 氣毛 波母
我家こ仙曰ふとこそ
芦火たくすゝけとこそ
住よきをこゝろみけ
くもいと久んやとこ
来うんやとこそ
をきゝうしの
仙曰まろねにけろこれをこれのをきうしは汁物そと
いてこ玉葉や玉ゝ女の汁をこゝろてよやこ後の物縁ゝ仙曰なそ
こうてこそ針こゝろてこゝろ

橘樹郡上丁物部真根 須義與氣半
椋椅部弟女
都筑郡上丁服部於田

こゝまゝてこゝろまろねのひもゝしは
ゐてこゝにけろこれのをこもし

波流毛志

由伎 伊伎郡久之
義称波保久毛 義等登
妻服部告女

わゝりもゝきりいさゝてくゝいゝれ
今ねこをこゝろをこゝろをね

等可奈 阿也尓 加毛 称毛
おゝてこゝろもの
埼玉郡上丁藤原部等母麻呂

ゐゝてゝゐゝゐゝてゝゐゝは
伊波 義毛 可毛
いそもいさゝやまのこゝもかも

妻物部刀自賣

いそふくせおゝこゝろもいうめゝしを

わゝりもゝきりいさゝてくゝいゝれ
仙曰いきつゝくゝいとや
今ねこをこゝろをとは
ゝゝてゝゐゝゐゝてゝゐゝは
いそもいさゝやまのこゝもかも
いそふくせおゝこゝろもいうめゝしを

三波良姿

みさくしけるそなまさやくふうん

昔年防人歌八首 主典刑部少録（ソノカミノ サキモリノウタ スエ ヲサカヘノセウサカベノ）

正七位上磐余伊美吉諸君抄寫（ショウシチイノカミ イハレノイミキモロヨシ スキ ウツス）

贈兵部少輔大伴宿禰家持（ヲクル ツカサノスケ オホトモノスクネ）

さきもりかゆくはしるせとらふひと

みるのともさきもりのもせす

阿米都之 奴侶

つめをはりのみよねさをきいそいつ

いまそわりせおあれをしも

和我

りの奇まし神かれてそすかゆんわさよさりくはゝもゝあり

らんそゝをゝもとんそ

いとこゝろわりを吉のみ

由須比 麻 和 尓

いとこゝろわを吉のみ

ゆすいはれらくとも

わりせおとれくはやりくうつみ

敝比 波 登加奈 久 尓 阿 乃 伊 ろ ろ

宇麻夜 奈波多都古麻 於久流我奴

うまやなるおろこゝれおくる

いしろいしをとをもくかなし

於岐氏 阿良之

つゝおいをさゝうみもりいちゝ

かあるまもつみいてくことあるく

仙日おそろ節とハ伏してこれ紙をまれハ封をまこそくハ起るくハ心にて屋内の紙切くハ起るハ好

4431　4432

我を起すかといひし妹を率て来しと　或説云これをかけつる縄さちて馳す
るは早き也といへり、謂る心、我振行にもとてすかといひし妹を率て来しと
防人をさ　仙覚防人は丈夫男をいふ頸におせは
こしにかくる胡簶とは矢を射ざりてはなりをさつめて負ふこととする我
もありとやかく出立つ事かも也　吾家師説はいとさきをさみは五百矢を負
挟みてや とさと同韻也　日本紀第一二五百箭之靫と有るを云おほくの矢をいふ
あれ出てよめる也

ささかはのさやぐしもよにななへかる
ころもにませるころかはたはも

笹が葉のそよぐ霜夜に七重着る
仙覚本かるは七重着る也
や東言ころをこゝといふ
妹が肌也　妹を恋ふる心

さへなへぬみことにしあれはかなしいもか
たまくらはなれあやにかなしも

佐弁奈弁奴　可奈之

さへなへぬてふし
仙覚本さへなへねとは坂
障へ敢へぬを云ふあれは
こいつるを云安藝物とり

同年三月三日検校防人勅使
并兵部使人等同集飲宴作歌

4433　4434　4435

不辞(サルニレ)とゝ東言なり
ねは障なへねと云ふとは
王命也　右八首は上の
家持の知れる防人の歌
あつめ書ける防人の
歌なれは擬ふ所なし
検校防人勅使　防人を
しらべみる勅使也
兵部使人　防人のことに
兵部省よりの使也
家持以下の人々也
あさなあさなあかる
仙覚本なくと云説
ひはりあかるはると
さやかはさやかなる祇
日なめ白きことゝ

三首

勅使紫微大弼(シビノタイヒツ)安倍沙弥麿朝臣(アヘノサミマロノアソミ)

比婆理

あさなさなあかるひはりになりてしか
みやこにゆきてはやかへりこむ

兵部少輔大伴宿禰家持

比婆里

ひはりあかるはるへとさやになりぬれは
みやこもみえすかすみたなひく

布敷

ふふめりしはなのはしめにこしわれや
ちりなむのちにみやこへゆかむ

昔年(ソノカミ)相替防人歌一首

以下四首上総国大掾正六
位上大原真人今城
伝誦云介年月未詳

霍公鳥哥一首

先太上天皇御製 日本根子高瑞日清足姫天皇 諡曰元正天皇

ほとゝぎすいまもなきなんともしかあけたてゝまつにはやくきかなくに

侍宴應詔奉和歌一首

薩妙觀

おほきみのみよをほぐとてほとゝぎすいまもなきなんあけたてまつに

冬日幸于朝原御井之時應詔賦雪歌一首 寧楽宮 于時水主内親王寢膳不安累日不豫此日太上天皇勅侍嬪等曰為遣水主内親王賦雪作歌者於是諸命婦等不堪作歌而石川命婦獨作此歌奏之

内命婦石川朝臣 諱曰邑婆 麻都我延

ゆきふるとあさまだきよりみるからにやどのかきねもうづもれにけり

上総國朝集使大掾大原真人今城向京之時餞之歌二首

郡司妻女等

うつくしと　わがやまこえて　いにしへを　おもひつつおり
これをのさき　そをとりつつ　たのしびつつも
あらたまの　ふるきことごと　わすれとは
よしかもあらや　こひわたるかも

同年五月九日兵部少輔大伴宿禰家持之宅集飲歌四首

大原真人今城

わがせこや　そのなでしこの　ひとよだに
あめそおれをも　いろもかえなす

大伴宿禰家持

ひさかたの　あめにみちたる　たなばたの
いやとこしくを　おもほすわれは

大原真人今城

わがせこや　そのなでしこの　ひとよだに
ふかれぬゆゑに　いわまくをしも

即聞鶯哢作歌一首

大伴宿禰家持

手具比須

うぐひすの　こゑにしきれと　おもふどち
こころのごとに　あそびつるかも